

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

月刊誌『福祉のひろば』は 2027 年春より、 月刊から年 4 回発行に移行します。

いつも『福祉のひろば』をご購読いただき、また総合社会福祉研究所の活動にご協力いただき、ありがとうございます。すでに何度かご案内しておりますとおり、月刊誌『福祉のひろば』は、2027 年 4 月より、下記の通り発行回数と定価を変更させていただくことになりました。2 月ごろにあらためてお手紙にてご案内いたしますが、ご不明な点などございましたら下記までお問合せください。

〈現在〉

〈2027 年 4 月以降〉

- | | | | |
|---------------------------------------|----------|---|-------------|
| • 発行回数 | 月刊 | → | 年 4 回発行（季刊） |
| ※春号（4 月）、夏号（7 月）、秋号（10 月）、冬号（1 月）発行予定 | | | |
| • 価格（1 冊） | 500 円＋税 | → | 800 円＋税 |
| • 年間購読料 | 6000 円＋税 | → | 3200 円＋税 |

〈問合せ〉総合社会福祉研究所

〒 543-0055 大阪市天王寺区悲田院町 8-12 国労南近畿会館 3 階
TEL : 06-6779-4894 Mail : mail@sosyaken.jp

現地に行って、会って、聞いて、 考えたことが力に

——第31回社会福祉研究交流集会in京都——



8月29日(土)・30日(日)に開催した第31回社会福祉研究交流集会in京都では、集会のテーマである「いのちを選別しない社会をめざす」を、集会当日だけでなく、より自分ごとにひきつけて深く考えられる機会をもとうと、いくつかの社会福祉法人のご協力のもと職員を派遣いただき、2つのグループに分かれて取材活動をすすめてきました。そして、集会当日のオープニング企画として、実際に現地に行って自分の目で見たり、当事者の方から直接話をうかがって感じたことを報告しました(写真は舞鶴の海上自衛隊基地)。



A組のテーマは、「京都から考える軍事基地化と平和」です。福田壮さん（社会福祉法人保健福祉の会・洛西保育園）、池増京香さん（社会福祉法人鳩ヶ峰福祉会・グループホームエスベリオ）ら計6人が舞鶴を訪れ、小西洋一舞鶴市議会議員の案内のもと、海上自衛隊舞鶴基地を視察し、その後の学習会では京都平和委員会理事長の片岡明さんから、京都府内ですすむ軍事拠点化について学びました。市民の暮らしのすぐそばですすむ基地強化を目の当たりにし、「何から、誰を守るためののか」という疑問の声が上がりました。軍事費が拡大されるいっぽうで、福祉現場が担い手不足や低賃金に苦しむ現状をどう社会に訴えていくべきか、平和と福祉のあり方について考える機会となりました。



B組のテーマは「当事者の声からいのちを選別しない社会を考える」です。^{しまもと なつき}島本夏翠さん（社会福祉法人いずみ野福社会デイセンターせんなん）と^{ゆきもと きょうこ}行本恭子さん（社会福祉法人七野会在宅ケアセンター新大宮）とともに、当事者の方からお話をうかがいました。1人目は、旧優生保護法違憲国家賠償請求訴訟原告である鈴木由美さん（写真中央）。12歳のときに説明なく不妊手術をされたのち、トラウマに苦しんで術後21年ものあいだ寝たきり状態がつつきましたが、「国は私の青春時代を奪った。このままだれにも知られずにいなくなってしまうのはいやだ」と立ち上がり、裁判の原告にもなったたかう鈴木さんのパワーと力強いお話に、行本さんも島本さんも「直接お会いしてお話を聞くことの大切さを感じました」と話されました。



2人目は、細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会代表／大阪医療的ケア児・者支援ネットワークWA！わっしょい共同代表の田中美紀さん（写真上段左端）と息子の世生さん。細菌性髄膜炎はワクチンがあれば起きないと知り、自分と同じ思いをする人がいなくなるようにと署名活動をはじめ、現在、ヒブワクチンは定期接種となっています。「伝えつづければ、いつか伝わる」と話す田中さんの力強い言葉に、行本さんも島本さんも、「私たちのほうが勇気づけられました」と、250人の集会参加者を前に、感じたこと・考えたことを報告してくださいました。

（写真・文 総合社会福祉研究所事務局）

●特集● いのちを選別しない社会をめざす
～第31回社会福祉研究交流集会 in 京都～

記念講演 森敏之さんの講演を聞いて	河崎 隆利	12
リレートークレポート	小山吉英・工藤英知	18
尊厳のある暮らしの場を求めて～「施設か地域か」を超えて～	小澤 恵	24
若年女性の貧困から考える社会と支援のあり方	原田裕貴子	26
医療アクセスから考える人権・生存権保障	上西 克明	28
民営化・市場化に抗う社会福祉実践・運動	大森眞貴子	30
過疎が進む自治体や地域での福祉と暮らし	小林 里美	32

●サブ特集● 社会福祉法など一括改正の問題点

介護保険改悪の内容とねらい

—3大改悪+2の現局面と介護改善運動の課題	日下部雅喜	34
「福祉サービス利用援助事業」についての課題	志藤 修史	40
「ケアの専門性」と人材確保施策への懸念	鴻上 圭太	42

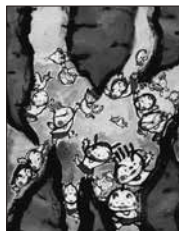
●トピックス●

演劇『長生炭鉱——生きたかった』の演出家シライケイタさんにきく	44
---------------------------------	----

●連載●

海の中から地球が見える	武本 匡弘	50
第7回 沈みゆく島 「核の難民」から「気候難民」へ		
『福祉のひろば』とわたし (8)		
そこに住む人、当事者、働く人を主役に	奥村 慶雄	52
政治を見る目 第8回 「あの戦争」について考えよう	長澤 高明	54
世界と交流する平和の船に乗ってみた! (南半球編)		
第8回 ナミビア——植民地支配と大量虐殺の爪痕	根津眞澄+オット	56
世界のソーシャルアクション!	阪口 春彦	60
分断の歴史をこえて——南アフリカのソーシャルワーク		
JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合 (68)		
「UNION TIME」をすすめよう		62
私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (68)		
暗闇からお天道様の下へ	尾野 義彦	64
阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (88)	水野阿修羅	66
育つ風景 おばけやしき	清水 玲子	68
映画案内 『姉妹』	吉村 英夫	70
現代の貧困を訪ねて	生田 武志	72
大原孫三郎・總一郎、山川均・菊栄、石井十次 (その13)		
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート		
水玉の女王じゃ!	ラッキー植松	74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
モトコの66歳えぶりでい	川口モトコ	77

●表紙の絵●
神門やす子



人と出会い、顔の見える 関係から平和をつくる

国際交流 NGO ピースボート共同代表 畠山 澄子

私が平和について深く考えるようになったきっかけは、一七歳のときの留学経験でした。高校二年生の夏から奨学金を得てイタリアの国際高校に二年間留学し、世界八〇か国から集まった約二〇〇人の同世代とともに学んでいました。

あるとき、生徒たちで戦争について考えるイベントを企画し、旧ユーゴスラビアなどの出身で戦争体験のある同級生に話を聞きました。その際、ある生徒から「あなたたちに私の気持ちはわからない」と言われ、私は何も返すことができませんでした。それまでの私は、戦争をどこか別の世界の出来事としてとらえていたのだと思います。戦争を学ぶこと自体には関心があっても、目の前にいる同世代の人が実際に戦争を経験し、苦しみを抱えて生きていることを、自分事として考えたことはありませんでした。この出会いを機に、「自分も戦争が起きている世界の一員なのだ。では、自分は何をするのか」と考えるようになりました。

一九歳のとき、通訳ボランティアとして初めてピースボートに乗りました。最初から平和活動しようというより、いろいろな国に行ってみたいという思いがきっかけでした。その船には、広島・長崎の被爆者の方が約一〇〇人乗船されており、三か月間の旅を通して、たくさんさんの被爆体験のお話を聞きました。旅の終わりに、ある被爆者から「長崎を最後の被爆地にしたい。でも、原爆投下から一〇〇年となる二〇四五年には、私はもう生きていない。だから、あなたのような若い世代の力が必要なんだ」と言われました。その言葉を聞き、社会の問題は単に「知る」だけでなく、自ら「問題を変えていく側」に立つことが必要なのだと感じました。

ピースボートでは、「過去の戦争を見つめ、未来の平和をつくる」ということを大切



はたけやま すみこ

ペンシルベニア大学大学院博士課程修了（科学技術史）。ピースボートで「おりづるプロジェクト」など、顔の見える国際交流を軸とした平和教育・船旅をコーディネート。立教大学で核のグローバル史を教えるほか、平和や戦争をテーマに体験型・参加型のプログラムも数多くおこなっている。共著に『ガザ虐殺を考える～その悲痛で不条理な歴史と現状を知るために～』（論創社）など。

にしています。戦争を国同士の政治的な関係だけでとらえるのではなく、そこで暮らす一人ひとりが何を経験したのかに目を向け、「顔の見える関係」を大事にしています。

以前、イスラエルとパレスチナから若者を招き、同じ船で生活を共にするプロジェクトをおこないました。最初は握手さえ拒むほど緊迫していた両者ですが、寝食を共にするうちに日常の他愛もない話をするようになりました。対立構造だけを見ると、相手を「イスラエル人」「パレスチナ人」という属性で判断してしまいましたが、実際に対話してみれば、その人にも大切な家族がいて、好きなことや悩みを抱える「一人の人間」であることが見えてきます。もちろん、それだけで対立が解決するわけではありませんが、相手を一人の人間として知ることには大きな意味があります。

現在もウクライナやガザで戦争が続いており、無力感を覚えることもあります。しかし、ウクライナ出身のピースボート船長から教わった「戦争をしている人たちにとって一番怖いのは、世界から忘れられることだ」という言葉の通り、「あなたたちのことを忘れていない」「あなたたちとつながっている」と発信し続けることが、絶望のなかで生きる人々にとって希望になると信じています。

私自身、最初から強い問題意識をもっていただけではありません。「いろいろな国に行ってみた」という好奇心から一歩を踏み出し、そこで人と出会い、話を聞き、知らなかった現実を知りました。平和をつくるためには、まず人と出会い、互いの経験を分かち合うことが大切なのだと思います。そして、出会った一人ひとりの存在を記憶に残していくこと。その小さな積み重ねが、遠い世界の出来事を自分の暮らしとつなぎ、社会を変えていく力になるのではないのでしょうか。

（聞き手 黄驥）

いのちを選別しない社会をめざす

大谷大学をお借りして開催した第三二回社会福祉研究交流集会in京都は、現地・オンラインを合わせ二五〇名超の参加を得て、二日間を通し、「いのちを選別しない社会」について、みんなで学び、考えました。今号のグラビアでも紹介したオープンニング企画で、B組の取材に同行しました。グラビアの写真がモノクロで残念ですが、旧優生保護法違憲国家賠償請求訴訟原告の鈴木由美さんは、きれいなピンク色のミニスカートにタイツ、とってもすてきなハイカットのスニーカー姿で来てくださいました。

好きな服を着て、自分のやりたいことをし、おかしいことはおかしいと声をあげる。前向きでパワフルな鈴木さんですが、鈴木さんの口から語られた強制不妊手術の被害の内容には、言葉が出ませんでした。鈴木さんが受けた手術は、優生保護法のなかでも違法な子宮全摘です。手術室の白いライト、器具の金属音が聞こえ、「いやだ!」と叫ぶなか麻酔をかけられた鈴木さん。術後もその景色がフラッシュバックし、からだが硬直し、PTSDによって一〇代、二〇代の青春時代を寝たきりで過ごしました。子どもも産めず、寝たきりのまま人生を終えるのはいやだ、障害があっても人のためになにかしたい、と必死でリハビリにとりくみ、自分で靴を買いに行ったときの思いをうかがって、鈴木さんのファッションへの思いの源を知りました。

不妊手術について祖母にたずねたところ、「ママはあんたのためにしたんやで」と言われ、母や家族への怒りや絶望感に襲われながらも、鈴木さんは「今思えば母も被害者だったんだと思う」と話されます。鈴木さんの出身でもある兵庫県は、当時の金井元彦知事が、優生思想にもとづく障害児出生の防止や不妊手術を強力に推進しました。金井元知事は、一九六五年にびわこ学園を訪れた際、「なんてかわいそうな子なんだ」と発言し、その後「不幸な子どもの生まれない運動」（一九六六～七四）を県民運動として推進し、自己負担が必要な不妊手術の公費負担などを実施しました。その運動は全国に広がり、障害を持つ子どもの親が、周囲からの圧力のため、または本人のために良かれと思って、不妊手術を決断する、ということが多く起こったのです。とくに女性は生理があることで、思春期になる前に手術を勧められることがあります。

周囲からの圧力、本人のために良かれと思って……ハンセン病問題とも共通する課題です。まわりに差別されて本人が嫌な思いをしないように隔離する。生理のときたいへんだろうから、子どもができても育てられないだろうから、良かれと思って不妊手術をすすめる。「良かれと思って」とおこなわれる人権侵害の残酷さ、そして、その根底には根深い「優生思想」があることを、あらためて突きつけられました。福祉従事者が元ハンセン病患者の隔離に加担し、人権侵害をおこなってきた歴史があることは明らかになっています。旧優生保護法問題においても、福祉従事者がそこに加担していなかったか、いまでも、「良かれと思って」人権侵害をしていないか……人権を守るとりである福祉従事者は、つねにそのことを意識しながら仕事に向き合い、そして、おかしいことはおかしいと先頭に立って声をあげる役割があるのだと感じました。

（編集主任 申 佳弥）